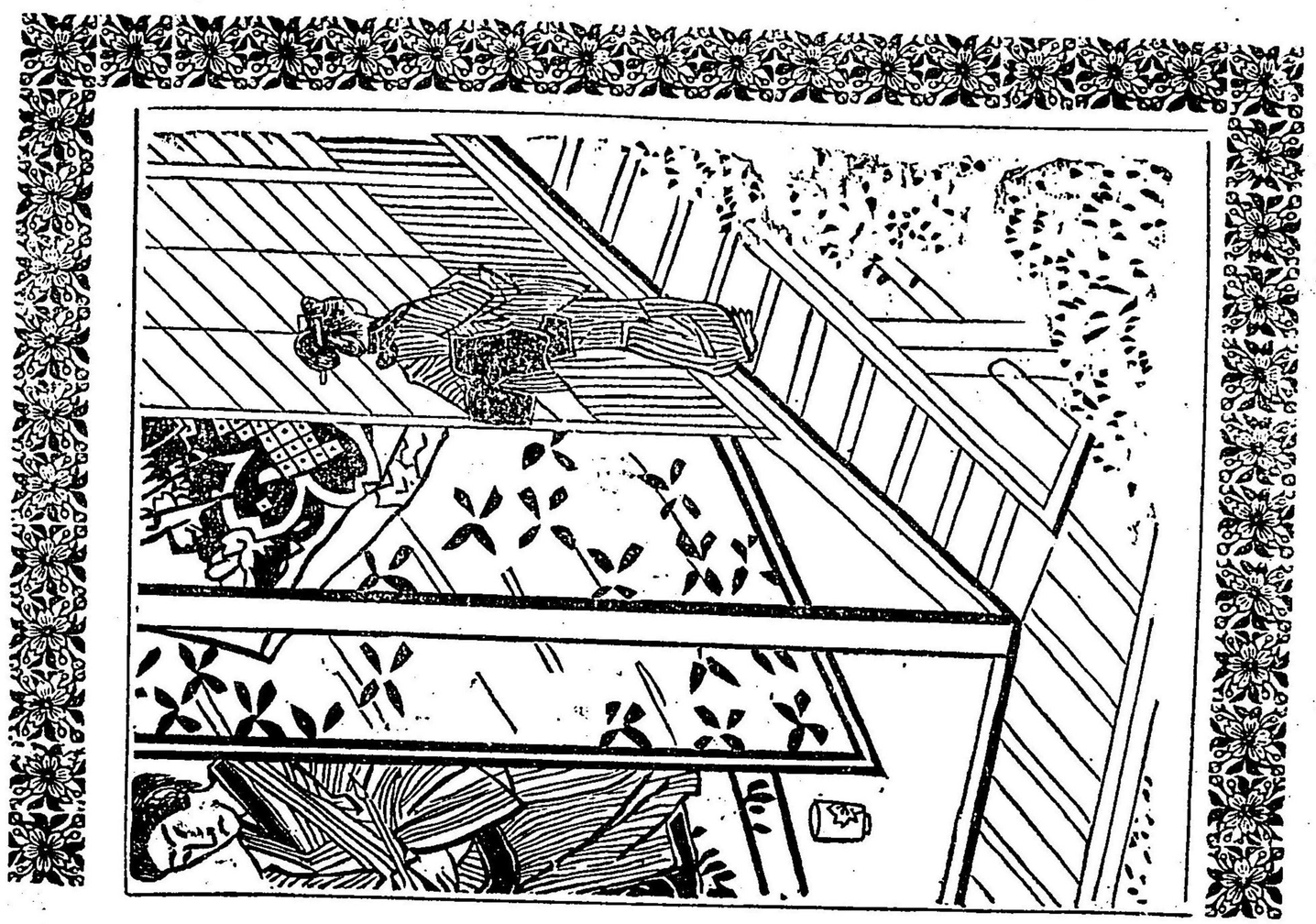
327

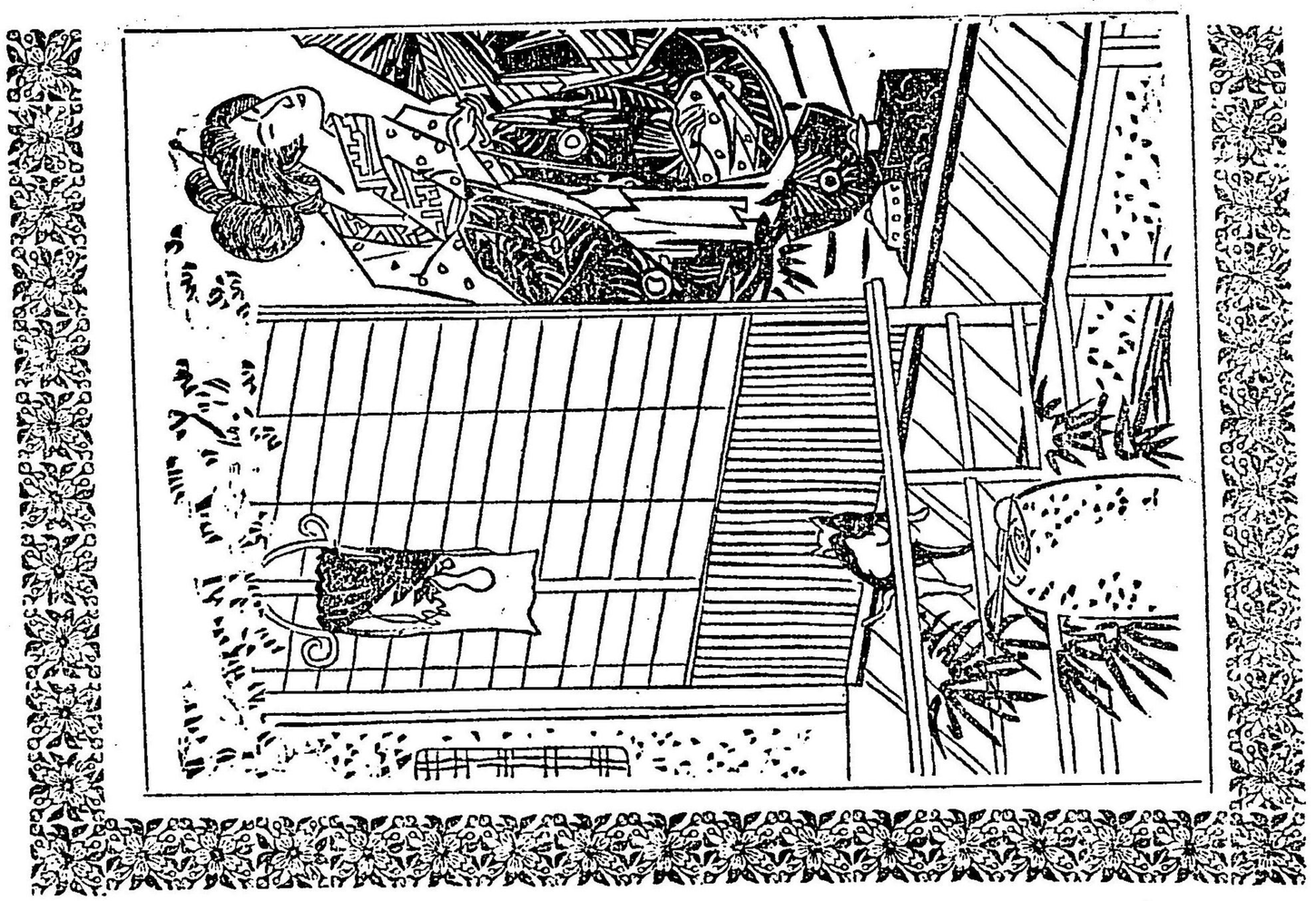
怪化娘出世指南全

笼棒痴人
池田喜多治 著

明治十四年
五月出版

弄花亭





自序

是れ爰を宜う聞き分けて下さんせ私しゃ迚も元氷乃素人じゃない粋も不粋も宜う知つて居ると蘭蝶摸擬で噺せて出す痴人は眞の浮世の罪人世の穴探しと人も云ふ新聞記者の端くれに長の年月従事て及ばぢながら世の事情はいらぬれ世話を焼餅喧嘩箱入娘の木魚講其他花柳の新猫話しヱラクラ鮨の髯縺れれ三の臂の匂ひ迄でありとあらゆる事情どもは殘る隈なくひつ書き廻り三都はれろか山の奥猪出る谷の底までも唯一嘘ゐ見屆て居る者なれば何一ッ嘘を実出し世の人を惑す如き悪計は決して致さぬ心なりされど心を知らぎして唯筆の毛の狸奴ゐ惑ふ時ゐは如何にせん是が非と襞り非が是となり心と筆とは反對に茫々夢か現の様誠者のれ目にちらづくべし去れば前よりて其積りで眉に唾付け狸毛の筆ゐ化され騙される心配なき様氣を付けて痴人が指南の趣旨を嘘が眞か嘘か宜く咬み分けて其嘘を蚤の羅丸虱の鼻毛蚊の息ほども中さぬをット分ッた成程と御合點なすッて下さるべく又れ美しい阿娘張あたら月日を遣羽子や手鞠遊に費やして大きなれ尻ゐ成る迄も母アや爺の世話

ふなゝ色香も見せぬ老花と移ふ如き事なき様篤と考へ出世の指南を受くいか様とれ氣も就たら孝行誼さ孝行誼と今より性根を入れ替て親ごに孝行誼されよヤレ頓派だの浮氣なのと耻を洒すも榮譽を探るも三方四方の治まるゝ皆阿娘の胸一ツエ、合點か行ッたかエ

明治十四辛巳の年雲花ちく〳〵嘯る時

半月樓の窓下ゐ誌す

笼棒痴人

特67
327

○怪化娘出世指南

目次

第一章　總説
第二章　男女同權
第三章　少女の粧ひ
第四章　習藝の順序
第五章　貧人女子を育つ
第六章　少女英雄を惱ーむ
第七章　少女初て教坊ゑ出づ
第八章　校書籍を轉じて權夫人とおる
第九章　馬骨正夫人とおる

第十章　輕戀ハ出世の妨げ

○怪化娘出世指南

第一章　總說

笼棒痴人　戯著

世の中ハ眠る程樂ハおかりける浮世の馬鹿ハ起きて働くとは是れ屁亂迷翁ハ口吟にして萬世不變の金言おり夫れ人間の世ハあるや一生僅に五十年と豫算ハ極つる短き壽命如何に富有の身となるとも如何ハ榮譽を世ハ賣るとも此世を去ればろれッきり何歡樂も無き道理殊ハ必ず五十年世に立つと云ふ證もなく無情の風が吹き來れは直樣往生安樂と味噌擂坊頭ハ寢言ハも珠數操返して說く如く眞ハ果敢ぬき浮世ハ夢

起きて働く者は馬鹿去りとて云ゐど楽々と寝て居る事のならざれば心ならすも皆人が櫛風沐雨の苦を嘗めて或は日雇官吏となるか或は農工商となるか或は按摩煙管仕替下駄の歯入紙屑撰と種々様々の業をなし辛度働き少々の金を儲けて妻を抱き妾を擁して一夜でも氣戯楽々ゐ寝轉せんと娯半分ゐ働くものゝ誰ゐ此世ゐ生來て浮世に馬鹿と呼れつゝ起て働く事をのみ娯みとなす者あらんそを是れ天地開闢以來自然ゐ備ゐし人情ゐて如何なる頓馬に冶郎でも間抜素慕氣に拙面でも毛頭志願に義御坐なくと証書を出して斷ハるハ箆棒痴人が三文版ゐ紅屑塗つて調印し屹度受合

處なり夫れ然ア而れは則ち世人に目的は唯熟睡一途にして其働くを勉むるも是ゐ皆眠アの下拵へ寐床の用意ア云ゐ為ゐれ是等の道理を突戀と早くも覺つて講究し假聲學士法螺氏の迷説等を引用し娘出世に指南にもならまほしくと愚惰々々しき山鳥の尾の長文句を綴る始ゑに此説を總説なりと書出しは其出世の目的に至用の關係あるを以て餘議なき都合に依り侍れは請ふ此篇を讀了ゑ次篇の講究に照されと

第二章　男女同權

釋伽牟尼佛の法螺に曰く婦人ハ外面女菩薩内心女夜叉又た曰く婦人ハ生れながらにして七個の罪を背負

來るを故に是等の罪を逃れ未來に安樂を得んと欲せば宜しく温順貞節よして夫を大切に親に孝他人に接して矜るなく單に下位に身を据へて必ず愛ぐことを勿れと是れ固より固辭付の説狂理屈と云ふものにて敢て信用する馬鹿なしと雖とも彼乃牟爾佛の支店に於てた廿茶の中にも是を交る觀音菊の中にも是を加へ飲むへきもの喰ふへきもの總て此甘味を加へぎるも し殊に線香抹香等の香物に ふすめく煙を起て人心を暗ま し迷はしめんと夥多の圖頭入道を派出なし説狂や云ひ阿法會と云ひ物に托し事に寄せ有事無事轉て廻はり以て此説を主張して天下に常暗と爲さんと欲す若し夫れ天下の廣大なるお顛派娘乃夥ふき万一是等の説狂に籠絡さるゝ者あらば箒棒痴人ハ婦人の爲めに涙泣嘆息惜まざらんと欲すと雖ども得ざるなり抑々婦人も男子と同く夢乃浮世に産れ來て夢に此世を過すのハ自然乃道理當然と云ふも不可ぎきも乃なれば何ぞ一生下に寢て夫を載するのみに以て滿足なりと云ふ可けんや時に上位を占るも好ふ何ぞ是等に理屈張て我茶々云ふを須ひんや又彼れ外面女菩薩だれ七個れ罪に背負だれと誠ふやかに吹き立てる法螺ハ固より法螺にふて何れ証據もあらをば嘘八百の出方題牟爾佛人に騙れぬと唯一言に押込んで

も何とを返答ハ出來ぬ譯去れば婦人と男子とを權利
よ於ても同樣よて決たく劣ることを者おゐば固そて出
世と自分の量見自分乃力でする事と何なヲ岐おヲ好
き氣儘心任ゐよする迚も差閊おき事なゑば寢て樂々
と世ゑ過す其分別を考ゐて必ず夫ゑ持つ迚も我氣よ
入らぬ拙面や不情交際す冶郎等よ押ゐ込はゑる事な
き樣婦人と婦人乃權式よて耻たゐらぬ夫を取り花の
樹ゑ小夜風や雲間の月の影を見て意氣な小窓ゑ裏坐
敷京間作の四疊半立て廻ハーたる六脚屏風模樣も粹
よ鴛鴦の番てなれぬ睦中ゑ世間乃人よも云てるゝ樣
一生娛しく寢て暮たゐ起て働く馬鹿者よゐらぬ思案ゑ

付ゐ玉ゐ箒棒痴人が指南すゐ其詳細と次章よヲ部類
順序を區別たゐて彌裏家ゑ餓鬼娘が瑤輿よ駕たゐて堂々
ゐる貴賢伸士ゑ邸よ入り權夫人とヲ北の方よ位ゑ進
ゑたゐ履歷を按たゐ其模範ゑゐゐ事跡を採て轉ヲ散すも
のゐゐば看官指南を受ゐ玉ゐへン

第三章　少女の粧

諺よ曰く藁人形も衣裳ゑ又ゐ曰く氏よヲ養育ゑ此語
何人の舌頭よヲ吐ゑ出たゐるものゐるや知らぬゑ雖
ども蓋しお前眞ッ暗の屁理屈よと非るかヲ出鱈目の
大法螺よと非ゑゐヲ今其眞意を玩味たゐ來ゑば成程至
極御尤仰ゑ通ヲゑ賛賞して以て其意よ應ゐざゑを得

ど夫れ夢の世に有様たるや昨年の富も今年の貧昨日に尊姐も今日の下婢榮枯得失天運乃廻り合せも定めなき譬ひ華族に士族乃ち性氏正しき産業なりても有ち悪しくば如何よりん弊衣着て路頭に身を潛め新平民乃車をも避ゆるゆばゆくぬ身乃仕末又喰物店に前に立ち指を喰ゑて咽鳴し涎を垂して見て居る様成り果つるのも圖られど此時妾ハ元何處の何某と云ふ者なるが不運より斯夕と云ふ處が誰一人それでハ参議某公の北の方よと媒妁の口出し處か小総等の妾になりとも云ふ人なく唯目前の諺言に夫ハ定て御不自由時節とハ云へ御氣の毒と云ふ位なる事よりて頭と間に合ふ話でなく去れば氏より養育なり藁人形も衣裳なり元ハ穢多でも乞食でも當坐の榮華が身の仕合せ世間に多き娘輩宜く此處を問き分けて昔固氣の婆さんや釋伽の寝言よ載らぬ様前よも説きし同權の理合を考へ我一と出世の目度を定め置き必ず次よ説く處を心よ留めて御讀みなハイヨ

其髪も則ち唐人髷を結ひ其帶は則ち紅錦を纏ひ其衣も則ち柳縞よ非ずも必す紬染其襌も則ち緋縮緬よ非ずも必す鹿子且其衣肩を摘み花簪蝶鈿を髪よ裁し花顔脣を縫ふて羞を含み風姿淑婉金蓮歩を移し或ハ老婆に扶けられて去り或ハ女伴に從ふて來る人皆目し

て雪下の梅蕾未だ春意を知らざるの女となす蓋し其齢二六ならざれば則ち二七嫖客能く其人を卜せを雖ども未だ其十七以上なるを視る能はざ然るに何ぞ思えんや此女年已に廿有一若し夫れ早く配偶せば已に母ァの組に入り一二の餓鬼を抱くの年なり試こに其女を自家に見れば則ち閨衣を脱ぐを厭ひ細帶腰に纏ふて襟を正さず乳房前に垂れて氣枕を欺き其髪ハ則ち亂れて箒の如く顔は垢に埋れて鼠色を帶び青鼻汁を垂らして温飩をすゝり臀を火達にくべて燒芋を嚼る其狀殆ど其人を異にし同一人に非るを見る宜べる哉藁人形も衣裳よりと此言實に欺かざるなり決し

て法螺に非るなを此女にして而して少女を粧ふ眞に神變鬼化と云ふべし豈驚かざるを得べけんや

第四章　習藝の順序

神變鬼化能く其容姿を變じ長幼意の如くにして能く其粧飾を凝らすと雖ども其粧飾を凝らすや難く其容姿を變ずるや難し容易に成し得べき業に非るのみ蓋し此業を修めんにハ概ね五六才の幼時より漸次學んで年月を積み影多の辛酸を嘗め來りて漸く十有八九に至り大略其振を合ひを覺ふと雖ども猶其温奥に至ては決して知り得べき業に非るのみ今其普通の業に付て是を習業する順序を解んに先第一に舞太皷及

ひ皷の三科を學び併せて都々逸琉球節等其折々の時歌を學び漸く長じて十一二に至れば即ち長唄清元等絲竹の調べを專務とし併せて言語擧動等酒筵の興を助くるに笑休より媚び諂ひ其他悲ミ鬱意樣氣障なとすねる處まで一々學んで又別に鴛鴦衾裡の痴話情談客意に傍ふに氣配等總て妓流と一般に手管の奥義を勉强し以て普通の科を終ふなり豈夫れ困難なる大業ならずや然りと雖ども婦人にして極々陋なる裏店より租先傳來の垢を洗ひ身に錦繡の衣を纏ひ觀花に納涼に觀雪にと榮華極まる盛宴に浮れ出るの幸福せを自由になすに至るもいかに如何に勉强刻苦して此他に事業を修むとも中々得べき事からねば先づ第一の好業とし婦人出世の道とハ爲す是れ假聲學士法螺氏が曾て千里の迷馬に跨り瞬時に全國を驅け廻ハり三都を始め五港等當時繁華の地に望み實地に人情を視察して女子狂育に方法を按じ編成したる狂育論に詳載する處の概略なり痴人大ひに是に惑ふ故を以て此章に引き摺り込み異見を合して理屈をこねて終つて次章に筆を轉ず

第五章　貧人女子を育つ

貧乏長屋の片隅に極々陋なる夫婦あり山の神を元來惰性にて寢て居て喰ふと飲むとより他に覺へざる藝

能なく糠袋一個を縫ふと雖ども概ね半月を費すと云ふ殊よ其性お顛派よりして常よ宿六を尻よ布き破褌を以て頭を包み飽くまで其臓を嚼るを業とす宿六何ぞ堪ふべけんや然りと雖ども宿六ハ性固と温柔何ぞ山の神を相手取りて愚吐〳〵云ふを欲せんや即ち忍んで其臓を嚼らゝ毎日一荷の古籠を荷ひ四方を徘徊して紙屑を買ひ僅の儲金を以て細々と漸く煙を立て居りゝが偶々山の神ハ布袋連と化け木魚講の組入せゝかば最ぞ貧ゝき宿六が日々の苦労ハ如何ばかり米櫃ハ常よ蜘の巣よ籠絡さるゝばかりよて此景況でハ身二つよ成つゝ所が育てんよも何とせんよも仕方なゝと頭をくゝつて居ゝりゝが月日の經つハ早きもの已よ十月も満ちければ安々女子を産み落ゝ扨山の神の思様男子と違ひ女の子ハ少ゝ成長なる時ハ賣つた處が金儲け甘々と行けば一生ハ米櫃なれば兎も角も好一儲有り難ゝと即ちそれより大切よもり育ゝが五ッ六ッと追々成人するものから破鍋鉄椀毀火鉢褌其他特鼻褌等古物探して賣り拂ひ僅の金もて古太鼓と破三味線買ひ求め教へて居りしが後終よ其子が十四の春となり時勢も今の景況よ移替りて幸ひよも大流行となられば夫婦の者も世よ出て其子の爲めよ安樂な月日を送る事をハかりぬと斯く其始末を書き終り

是より其子の全盛を説き起すべき順序なるを此章を
爰に結ぶものと其子の全盛を極むる様成行くものと
彼の修業の能く温奥に通達し以て其途を誤らぬ藝が
助る道なれば次章の説に説き交ぜて其指南中の詞一
とせんと編者が筆の都合なり

第六章　少女英雄を惱しむ

川柳子曰く肩揭末御前門巳綻びて穿てる哉穿てる哉芳
紀二七の女幼情未だ容姿を離れず遣羽子に戯れ手鞠
に遊び眠るや母アの手を枕に一起るや母アに覺眠菓
を請る出て人に接するや羞を含み姉えんと呼び私イ
と云ふや必ず低々幼音を凝し蟻を見ても恐ハやと云

ひ蠅を見てもアレーと騒き談春事に至れば私イハ知
りませんヨ袖を排せばアヲ私イハいやですヨーと言
語起居總て末破瓜女に属去り其春意を解するの女な
るを知らしめず然に何ぞ思ハんや一回是を衾中に試
れば唯々命に從ふて敢て拒まず秘術を極めて鋭鋒に
當り一進一退能く其戰ひに交和し去る是れ修業の巧
に非ずして何ぞや夫れ業を絃歌師の門に受くるや端
歌と云ひ長唄と云ひ其節調異るとも雖ども均く是れ花
情春意ものならざるなし殊に清元新内に至れば曉
烏だに蘭蝶だの贋祭だの様々と戀の淵瀬の浮沈を最
事細に調ぶれば其春に早き其色に濃なる固より怪し

むべきものゝあらざるかり若し夫れ是等の業を修め
ざ因循徒然空しく年を迎へ以て此齢ゝ至る時ハ其餓
鬼連々一般にて猶鼻汁さらしの組合さるハ免かれ難
き處なるべし此女已に春を賣る其幾回なるを算すべ
からざ是ゝ依て以て父母を養ふ豈孝行の業ならざや
痴人是を以て第一の孝々なすなれハ元夫れ生る
ゝ時此卿關を出しゝあらざや況や其身体を造成せし
ハ父母此突職の巧を積み偶々かしさるものなるをや
世人若し此理を推究せば恐らくハ思ひ半に過ぎん
此女偶々お匠師さんを伴ひ櫻花を某の佳園ゝ看る雅
客群をかし美人來往す來りて酒を酌むものあり醉ふ

て而して去るものあり踊るものあり舞ふものあり謠
ふものあるもの各々其娯しむ處を盡し其好む處を
恣まゝゝす此隊ハ即ち一女群紅粉香を發し長幼美を
競ひ神を連ね踵を接し除歩閑談悠々として進み正ゝ
佳園ゝ入んとす滿園の醉客見て聲をかし花下又花あ
りて即ち羞て敢て進まざ時ゝ偶々髯公あり蓋し土曜
日の半休ゝ乘じ來て鬱を散ずるの士有名的の武人か
り杯を上げ髯を捻り女を諦視して瞳ゝ離さざ暫らく
ありて該茶店の老婆ゝ招き耳ゝ借て以て私語し去る
老婆うかゝ他を見て笑ひ實ゝ美しいものですチヘ
然も未だ他ゝ在て其何の識なるを知るゝ由かし時ゝ

女群已ゑ園ゑ入る総公目送して以爲く美も亦美なり
艶も亦艶なり斯の如きの美人ハ又得難からんや是れ
則ち髯公初見の情なり爾來益々情を凝し百方手を借
り以て此女を求めんを欲す然るも未だ其情花を看る
能ハざ所謂思案外の苦しみを呑んで爲ゑ懊惱病を發
す夫れ英雄已に斯の如し蕩客何ぞ涯を流さゝらんや

第七章　少女初て教坊ゑ出ぜ

九尺二間の裏店ゑ生れ塵埃の内ゑ成長し嚮ハ上淨を
すゝつて以て其日ハ生活を辛くなし刻苦して而して
彈絃を學び以て今日榮華を極むるハ根起を養成しる
る者ハ豈感服ハ至りならざ哉此女年漸く十六に至る

藝已ゑ熟し術已ゑ長ぜ謂く徒らゑ陋巷に潛居して以
て曖昧的ハ名を採らんより寧ろ妓籍を教坊ゑ掲げ朝
招夜聘ハ豪客を釣らんと即ち某街ハ校書なる女や
未だ幼なり然も老妓に一歩を讓らす能く客意を釣て
以て全盛を極む時に會ゝ総公ゑ陪す総公一瞥見て以
て奇とし謂くこハ是れ前年觀花の際某の佳園に初
見して爾來追慕し思ふの女なり今や爰に邂逅す是れ
我花なを我金力を以て手生とせんと即ち直ゑ樓主ゑ
謀を千有餘金を投じて以て得て權夫人とをさんと約
す豈盛なをと云ちざるべけんや教坊を擧て以て羨み
望む亦宜なりと謂ふべきなり

折花の遊戯を試みる者ハ愚なり攀柳に痴劇を望む者ハ痴なりとハ是れ無意氣の馬鹿者が其實際を知了せざ徒よ膳酒の一杯よ醉ふて醉陽論管に卷よて引と摺て出しゝる理屈にて一歴尤もの如くなれども其實際を考れば盲減方界に屁理屈と云ハざるべからざるもあるなり夫れ折花乃遊戯にあれ又攀柳の痴劇よあれ是を試み是を望むハ是れ天然に人性にして人間目的中の第一等即ち氣を楽々よ寛轉して以て好事を遂るもの他に勝れる非ざるなり夫れ然り而ば則ち教坊よ在て校書の籍を掲る者亦有用の人物にして決して忌むべきものに非るなり是れ校書等に其道を學び其術を究めて怠らざ大ひよ其業を盛よせんを希望する處の理由なり一日校書蘭湯に談す曰く昨宵痴客あり一見忽ち某妓を購ふ某妓幼なりと雖ども能く其術を修む他よ良人のあるを捨て唯々其命よ從ひ以て莫大の金を得たるを他妓曰く然る是れ一般妓流の能ざる處那の妓獨能く之を行ふ早晩其夫人と成る知るべきにみと他又曰く眞よ然る矣那の妓の見る處必ず是れり夫人と成て而して事をなす實よ易々なり那の妓を買よ才子なる一般の妓流に非るなりと夫れ世の娘輩是を聞いて果して如何なる感覺を起すや其理財上よ明かなる其英斷に斷乎なる實よ感服すべき少女なら

すや此明智を以て而して此英斷をなし其金を得るの夥多しき實に推知し得可きもの乎

第八章　校書籍を轉じて權夫人となる

姉はん今晩ハ。ヘイ何方もとも是れ妓流が陪宴の際先ツ段階梯を登り來りて金襖を片手より半開き片手を閑より坐につゐへて挨拶する處の通語なりアリ。ヨロ。パバとハ謝禮に常言より總て是れ花柳一種の言決して通衢より用ふべからざる今や校書籍を轉ぜ先ツ其言語を改めざるべからざる其体裁を改めざるべからざる又ハ其舉動を改めざるべからざる其改むべきもの已に斯に如く多し實より多忙しき事なるかや若し夫れ一朝物議間違へ細紐帶で立膝をならかし又ハ貴賓に前より於てアリ。ヨロ。パバの地金を出そば且那の面目を云ふも更なり馬骨の本体議見届けられ耻議世間より洒すより至らん是れ議以て妓流ハ家常毎より夫人權妻の言語舉動其他衣裳頭髮等萬端相摸し相凝して是が下拵へを學ぶと云ふ蓋し又緊要的の一事業ならん乎

那乃妓も漸く十六年より早く已より某鯰公の權夫人とおり悠然某の別莊に移る他人謂らく危哉那に妓恐くも早晩馬骨を現ハし以て擯斥さるゝあらんと然るより何ぞ圖らんや那の妓更より誤らざ寞より在ては典を添へ聞より在ていハ歡を進め權夫人なるの本分を盡し以て

総公の心を飽かしめ天晴老練の輩に讓らぜ能く其職を奉じ為めと是れ固より那の妓の才智一般女流に過るを以て能く其誤らざるを致すと雖ども又家常刻苦たて修業たたる勉強の功に非るを得んや是に依て之を見れば女子乃狂育も男兒と同く進めば彌〻難くなり難ければ益々緊要にて實に是が成業の日を見るを一朝一夕に非るかり是を奈ぞ無益視たて徒らに遊戯物に名を下し花嫁仕立に物眞似とし以て忽にすべゆんや娘乃出世を是に依るなと必ぜ勉めて學ぶべきを然らぜんば曖昧ハ曖昧に止り妓流を妓流に止らんにみだ哩

第九章　馬骨正夫人となる

女や固より望み高し矣決して權夫人を以て甘んぜざるかり早晩位を進めて夫人とかり孺人尊姐と稱せらるに光榮を專らにせんと欲す是れ則ち英斷を以て良人を去て來て權夫人となり懇切情待意に副ふて敢て背かざる所以なと若た女に非して望みなくんば何んぞ蓬々たる髮を撫で忍んで其意に副ふに愚をかきんや即ち機に投じて以て去んぬみ然るに謀こと此に出ぜ悠々とし止り媚るもに ハ即ち女が遠大の策にして他人に窺ひ知ぜ所に非るなと是を以て公益鼻毛を延し曾て其傍を離るるかく相對して而して杯を傾け

相擁ちて而て春味を舐り細君の涸洞を顧みさるに至る女謂く機正に近にあらんとを細君若し一回妬嫉を吐らば我將に理を以て公に說き以て其志を遂げんものと嗚呼眞に女は才子なる哉誰か夫れ之に感ぜざらんや時に細君妬嫉を吐來る公怒て之を毆打し了す女喜び得ありとなひ併も敢て其色を成さど驚き起て之を和解し旦公を制止して拜一拜悲情眼に含んで口隱に其毆打の非道を說き孺人を憐み旦公を恨み以て自ら去らんことを乞ふ鯰公何ぞ許さんや默然坐に在て他を瞋視す細君大ひに女の意に感ぜ又何を平謂をん即ち直に自家に去る是に於て乎那の女鯰公に迫て喃々恨みを說て敢て聽ざ即ち將に去んとせ鯰公周章之を留め背を撫ち慰藉し旦曰く余配ありと雖ども汝れハ之れ自ら娶る者に非るも父母の命拒むべと能ハざるをり終に此に及びるるをり卿若ち是れか爲めに去らんとなれば余は彼を逐ふて卿を止めん卿それ之を諾し せば卿ハ是れ自家の夫人なり卿願くハ留れと女曰く否是れ妾の信ぜざる處留り弄せらるゝ愚を なさんやと鯰公又曰く然ば其嘘實を知らちめんと即ち直に細君を逐ひ女を以て終に夫人となす今若し後進代妓流輩此策に倣ふて以て事をなせば恐くは見事遺ッ付けん哩

第十章　輕戀ハ出世の大妨げ

諺ニ曰く蓼喰ふ虫も異好と當るる哉其言痴人今婦女子の素振を窺ひ其色眼の使ひ方を見るニ或ハ眼を剝き口を曲ゲ無暗ニ舞臺ニ出て威張散す俳優ニ似れる者もあり或ハバタ〳〵張扇を以て見臺と喧嘩する落語家ニ惚れ或ハ高帽ゲ官吏ニ似れ或ハ毀下駄の書生ニ惚れ或ハ前垂掛けゲ床屋ニ似れ或ハ帳場乃番頭ニ似れ丁稚ニ似れ親爺ニ似ゲ盲ニ似ゲ聾ニ似ゲ千差萬情實ニ人毎ニ異ニして未だ其何人ニ惚るゝを以て第一とるすか知らゞを雖も到底其何人ニ似れるゲ雖ども能く其思ひを遂る時ハ眞ニ誤愉快なる事なるべし

然りと雖ども是等の内必ゲ善惡非るべからす請ふ試みニ之を說ん

箒棒痴人接するニ凡そ婦人のゲ似べきものハ先雛男ニ限るゲ雖ども苟も出世を望む代輩ハ必す雛男ニ迷ふべらゞ迷ふや必す誤らん川柳子曰く雛男金ゲ意氣地ハなかりけり。と實ニ然り決して僞ニ非るなり若し夫れ一文なしの雛男ニゲ似甘々ゲ主尾好く夫婦とおり其宿志をば遂るゝと雖ども何を以て乎今日を送り氣樂ニ寢轉するを得んや然れハ即ち何ニ依て乎浮世の娛を自由ニせん是れ則ち馬鹿の隊長ニして惑情者ゲ云ふべきおり去れば俳優ニゲ似れる者落語家流ニゲ

ゆる者皆是れ輕戀者と云ふべきのみ痴人藪瞎的の目玉を以て常ゑ是等の社界を見るゑ惑情女を裸體ゑして其瞞を嚼る者往々之れあゑ豈殘酷の至りならずや然りと雖ども是ハ之れ其ゐぢる者の罪ゑ非るなり惑情連の誤ゑのみ嗚呼輕戀ハ出世ゑ大妨げゑ云ふべき乎請ふ江湖の阿娘輩願くハ此理に着目し隈ゑゑ春風に緋褌を卷らす丹鼎を縮ゑ餅白を据へ將來の出世を計らゆよ

怪化娘出世指南終

出版書目

○夫婦情談　蘭房樂門　小本　全一冊

此書ハ夫婦の情合より並ぶ枕も川乃字ゑ子まで設けて寢る閨の秘樂等ゑで最と可笑しく戯れ綴りしものなれば老幼男女ゑ區別なく必ず一讀笑覽して其眞味を知らざれば酒筵茶席ハ云ふも更面白可笑ゐい話の坐へハ顔出しされぬと云ふ樣なる古今無類ゑ珍書なり

○演劇叢談　好人情史　小本　二冊

此書ハ古今の好男子が美人を迷ハし身も迷ゑひ互ゑ命も惜まぬ樣深くゑまりし戀の淵其浮沈を演劇ゑ仕組最

と面白くものしるる奇妙奇体な人情書なれば演劇で云へばイヨ音羽屋アーと看官諸君の御愛顧ハ今より知れて居る書なり

○絲代調べ廓代お土産　小本　一冊

此書ハ四方の雅君粋客互ニ意氣を競ハれる都々逸を集録しものなれば廓のお土産ニハ實ニよろし

右ハ篦棒痴人とて篦棒なる名を博しる酒蛙突氏が酒畦突然と筆を取り突戀愉快と墨黑ニも書き廻ハされるものなれば隨分時流ニ先ちて珍しからんと思ふよりて近々出板致さんと目今印刷の最中なれば發兌ハ日を待ち御愛顧あれ

明治十四年五月七日御届

同　年同月　出版

定價拾五錢

著述人　岡山縣平民　池田喜多治　全縣下備中國後月郡奥井村五百十九番地

出版人　愛媛縣平民　梶原猪之松　全縣讃岐國香川郡高松西新通町十八番地

賣捌所

讃岐國高松西新通町　佐久間支店

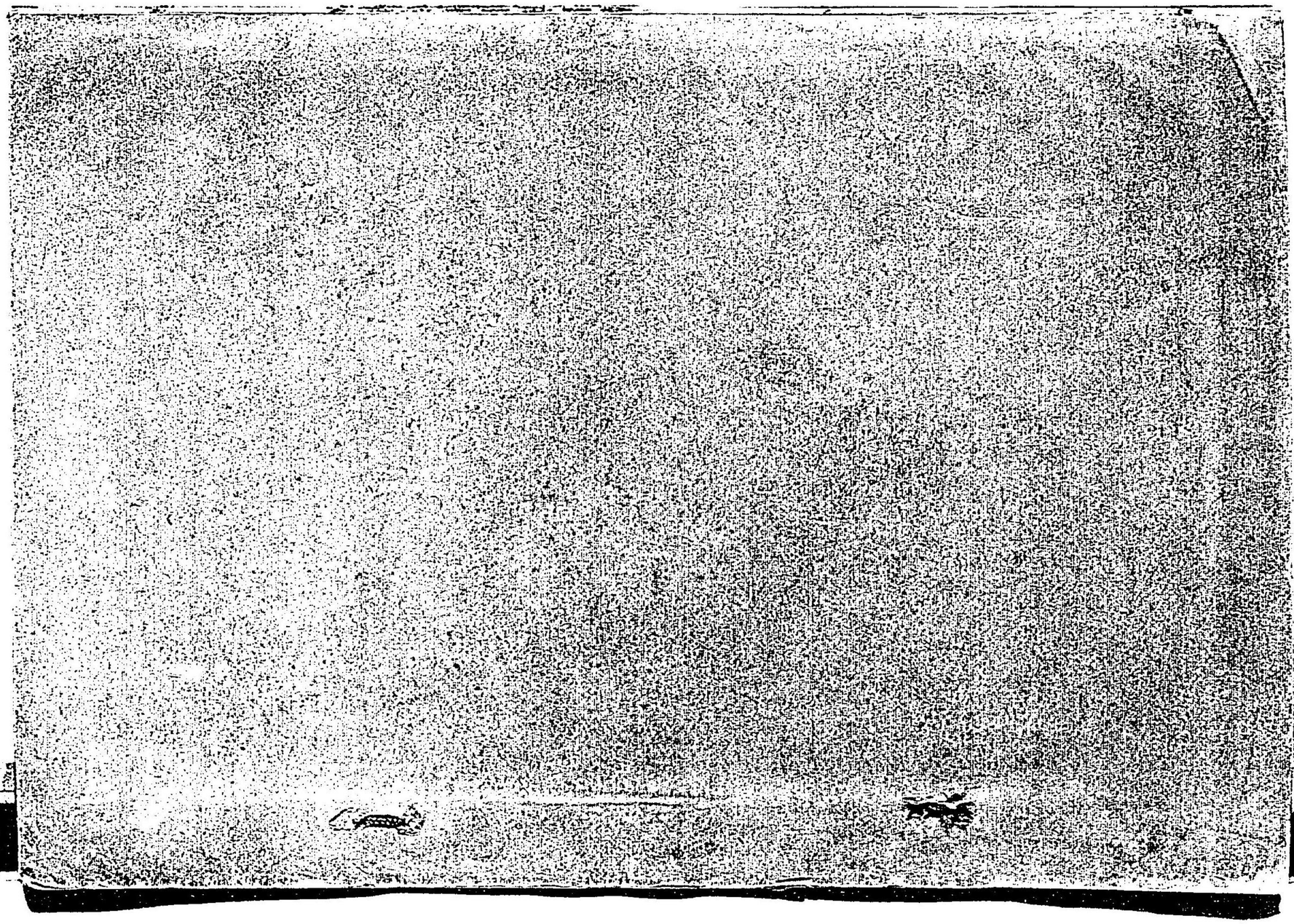
同　丸龜通町　市原日進舍

伊豫國松山湊町　玉井新次郎

仝　向井藏次郎

右之外各府縣繪双紙店新聞舗等へ差出居候間最寄

御便宜の賣捌所ゟ就き御購求あらんことを希ふ



特67
327

091610−000−1

特67−327

怪化娘出世指南

箆棒痴人／著

M14
DBO−0056